「ひどい爆撃 脱出決めた」

ウクライナ避難 樺太出身・降籏さんの孫ら

ロシア軍が侵攻したウクライナの北部ジトーミルから北海道に避難した降籏英捷さん(78)。1歳の時に日本統治下の樺太(現ロシア・サハリン)で1945年の終戦を迎え、旧ソ連やウクライナで生活してきた。一緒に避難した孫らが31日、滞在先の稚内市で取材に応じ、ポーランド経由の避難の様子や、現在の心境などを語った。

ウクライナの状況を問われて悲痛な表情を見せる降籏英捷さんの孫の妻インナさん(左)と孫ウラジスラワさん

降籏さんが住んでいたジトーミルは、首都キエフと西部の拠点都市リビウを結ぶ幹線道路が通る要衝だ。

ウクライナ国防省の発表や現地報道によると、3月4日、歩兵戦闘車などの兵器を改良・修理する大規模な工場がミサイル攻撃を受け、破壊された。

孫の妻のインナさん(27)は「ひどい爆撃があった。最初に空港の軍事地区が爆撃された。そこに隣接する住宅や病院にも爆弾が落ち、窓が割れたりしていたのですぐに決めた」と振り返る。降籏さんは妻と二人暮らしをしていた。当初、避難を渋っていたが、孫でインナさんの夫のデニスさんが強く求めるとついに決断。5日、インナさんの父が運転する車でジトーミルを脱出した。

途中、リビウで、孫で美術学校に通うウラジスラワさん(18)と合流したのちに、ポーランドへ向かった。道中でロシア軍の攻撃に巻き込まれることはなかったが、車が故障するなどトラブルもあった。

「一番大変だったのはポーランド国境で1日立ち往生した時だった。たくさんの人々がいて、車やバスも帯のように続いていて、本当にゆっくりとしか動かなかった」

そんなときも、陽気なひ孫のソフィアちゃん(2)が車内を明るくした。ポーランドに入国できたのは、8日になってからだった。

避難を応援したのは、日本サハリン協会。樺太出身の降籏さん一家のうち、存命中のきょうだいはすでに日本に永住帰国している。そうしたつながりなどから、斎藤弘美理事長らが動いた。降籏さんらは19日に来日し、まもなく2週間を迎える。

グラフィックデザイナーを目指すウラジスラワさんは取材中、スケッチブックに自分の気持ちを絵で表現した。これまで滞在していた旭川の街の雰囲気や、自分がラーメンを食べる様子などを描いた。

停戦交渉の報道もあり、ウクライナの状況は良くなりつつあると信じつつも、先は見通せない。帰る日を待ちわびつつも、ウラジスラワさんは授業をオンラインで受けるなどして、自分の将来を考えながら、も進む。

「私たちにとってこ争は最初のもので最も恐しいものだ。おじいさんはもう若くはないが、以前に(サハリンで)さらにひどい状況を生き抜いてきた。おじいさんは私たちのため、自分自身のためにつらい状況を生き抜いてきて、今後のつらい状況も生き抜いていくことができると理解している。おじいさんは私たちを愛してくれているし、私たちもおじいさんを愛している」

(大野正美、戸田拓、松尾一郎)

対岸から見た故郷「美しいな。ああ、神様」

ロシア・サハリンを眺める降籏さん(右から2人目)。孫の妻インナさん(右)やひ孫ソフィアちゃん(左)、孫ウラジスラワさんが寄り添った

降籏さんは31日、永住帰国している兄の信捷さん(80、稚内市在住)と、妹の晶山レイ子さん(70、旭川市在住)とともに、稚内市の北防波堤ドームを訪ねた。敗戦の45年まで、この波止場まで鉄道が通じており、人々はここから稚泊連絡船に乗って樺太(現ロシア・サハリン)へ旅立った。

訪問時の波止場付近の天気はよく、風もなかった。

「はっきりみえるわよ」と、レイ子さんが防波堤の上からロシア語で呼ぶと、降籏さんは防波堤上の壁に身を寄せ、海の向こう、雪で真っ白になった故郷サハリンをじっと見つめた。

今回一緒に避難してきたひ孫のソフィアちゃんが見えるようにしてほしいとせがむと、降籏さんは「見せてあげるよ」と抱き上げた。ちょっとして、「美しいな。ああ、神様」とつぶやいた。孫の妻でソフィアちゃんの母親インナさんと、孫のウラジスラワさんもそばに寄り添って対岸をじっと見つめた。

泊原発 停止10年超確実

制委会合

委から、地震による地盤の液状化で地盤沈下する恐れがあると指摘された。このため、現在の防潮堤は撤去し、地盤の下にある岩盤に定される津波の影響▽火山の活動可能性や火山灰に関する影響などの審査が控える。北電の担当者は「論点は絞られてきている。規制

ーレ

栄誉賞

ながった」

コ・道庁

ページ

ル不正

を懲戒

道教委

道立青少年体験活動支援施設「ネイパル」の指定管理者選定をめぐり、道教育委員会の職員が特定の団体に便宜を図る不正があった問題で、道教委は30日付で、当時の上司だった前生涯学習推進局長の男性参与(60)を減給10分の1(2カ月)の懲戒処分にした。

道教委によると、前局長はネイパルの指定管理者の公募期間中、担当の社会教育課長(当時)から不正な申請書作成に関わっていることを明かされながら、指導や是正、上司に報告せずに不正を放置した。1～2月に弁護士が調査した際、相談してきた担当課長に「覚えていないと言えばいいのではないか」と話し、事実の隠蔽を示唆する不適切な発言をしたという。

前局長は31日付で定年退職となり、減給の対象は1日分になるという。

(中野剛三)

式で、スキップの藤沢五月選手は「北海道中のみなさんの応援を氷上で感じられ、前向きなプレー、良いショット、グッドラック(幸運)につながった」と述べた。

当初は日本初の金メダルを逃した悔しさがあった選手たちだが、帰国後に開催

で今の私がおしゃれに変わる!
特別価格